自販機の元で過ごすひととき

小豆色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自販機の元で過ごすひととき

【Ｎコード】
Ｎ６２５７Ｚ

【作者名】
小豆色

【あらすじ】
みなさん、早起きしてみませんか？案外面白いものですよ？
テーマは「早起きは三文の徳」です。
少し変哲な、でも暖かいお話をイメージしています。

「う～。寒すぎだろ」

身震いしながらふらふらと散歩を続ける。
今は１２月。ただでさえここ北陸は冬が厳しい。
その上に今日は雪が降るそうだ。寒いのも当たり前。

なんでそんな日に散歩しているのかというと。
ずばり、早く起きすぎてする事が無かったからだ。
で、久々に散歩でもしてみようかなと思った訳だ。
休日に限って早起きしてしまうのは人の性なんだろうな。

…でも今は後悔してる。いや、だって寒すぎだろ。
やっぱ思いつきで行動するもんじゃねーな。
なまじ遠くまできてしまったから帰るに帰れないし。

「…お。十円みっけ」

ふと横を見ると、公園のそばにあった自販機の近くに十円が落ちていた。

「早起きは三文の徳、ってか。でも三文が十円なら俺は寝る方を選ぶな」

だってねえ。久々の休日に無理して十円探すなんて嫌だし。
実際、三文ってその程度らしいけれど。

まあ、貰えるもんは貰っておこう。そう思って十円を拾い上げた。

その瞬間、

「くぉぉるぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「うわあぁ！？」

どこからともなく怒声が飛んできた。
あわてて公園を見渡すが誰もいない。

「何やぁってぇんだぁぁぁぁぁ！」
「ぎゃっ」

な、なんだなんだ！どっから声が出ているんだ。
人間、パニックになると本当におろおろしてしまうんだね。
やばいもう訳分かんない。

「…くすっ」
「そこか！」

小さな声に反応して本能的にビシィッと指を指す。
その指の先にはさっきの自販機があった。けれど人影はない。
まず公園に来てからから人をみてないし。

「…ちがうｋ「よく分かったな、その通りだ」あがっ？」

あまりの驚きに後ずさってしまう。
な、なんてこったい！喋る自販機なんて初めてみたぞ！
にしても結構渋い声…。見た目のボロさとリンクしてやがる。

「な、なな…。本当に喋ってんのか？」
「見た通り。それよりお前、一つ言っておこう」

これは怒られるのか？俺何もやってないぞ。
いや、それ以前に喋ってるぞアレ。こういう時って警察なのか？
とりあえず用件を聞いてみよう。こんな事滅多にないし。

「な、何だ。いってみろ」

びくびくしながら答える俺。我ながら情けないとは思うさ。
でも仕方ないと思わないか？思わないならちょっと体験してみろ。
マジ怖いから。

「ちゃんと敬語を使いやがれえぇぇぇ！！」
「ひゃ、ひゃいぃ」

「で、本題なんだが」
「はい」

一通り驚いた後、俺は自販機と会話していた。
端から見るとただの怪しい人です。本当にありが（ｒｙ
通報されないうちに帰りたいわ。

「さっきお前十円ひろったろ」
「はい」

ふむ、三文の事か。確かに拾ったな。
そう思ってうなずきながら返事をする。

「確かに拾いましたよ？」
「あれ返して」
「はい……は？」
「いや、あれ自分のだから」

こっ、こいつ渋声のくせにセコい奴だな。

「はあ…」
「じゃ、早く入れて」

「はい」

まあ、これくらいで帰れるのなら…。そう思って十円を入れた。
すると自販機の声が満足げになった。分かりやすい奴。

「よし」
「じゃ、俺は帰りますね」
「ん。…いや、待て」

少年生並にきれいな回れ右を決めた所で引き止められた。
くそっ、ノリでいけると思ってたのに。

「なんですか。もう帰りたいんですが」
「お前、好きな人いないのか」
「…は？」

何だコイツ。頭おかしいのか？

「なんでそうなるんですか」
「服のエリがしわくちゃだからだ。さっさと嫁さん貰えばどうだ」

うっ、い、痛い所を突きやがって。

「ど、独身で何が悪い！」
「値札もついてるぞ。ズボンの腰だ」
「うわ、本当だ」

今回ばかりは真面目に洗濯しようと思いました。
自販機にまで注意される俺はもうダメです。
恋人欲しいです。嫁さん欲しいです。欲しいとです！

「さて、これで一つ貸しができたぞ。さあさあ、観念して話すがいい」

コイツ…なんで俺がそういった貸しを断れないって知ってるんだ。お人好しもいい所だと思うが、断ると気になって落ち着かないのだ。

これも性分という所だ。

「くっ…。…はあ、しょうがない。誰にも話さないでくださいよ？」

「まかせろ。口は堅い方だ」

はあ、なんで話すハメになってんだ。三文どころじゃないぞ。

…。

……。

……。

まあいいか。そろそろ誰かに相談しようと思ってた事だし。

喋らないって言ってるし、自販機だし、実名出してもいいよね…

「じゃあ話します。俺には、同じ部署に好きな人がいます」

「ふむふむ」

結構興味津々だな。自販機なのに。

「夏目楓さん、っていうひとなんですけど。

俺はかえでちゃんってよんでるんですが、とっても可愛いんです」

「…」
「一つ下の後輩なんですけど、本当に可愛いんです。
ちょっと天然な性格も混じってみごとな男殺しになってます。
髪の毛もロングでサラサラだし、すごくいい香りがするし。
笑顔も素敵だし。声もきれいだし。歌もうまいし」

ホントに、彼女はもう芸術の域なんだ。見れば分かる。

「何をやっても上手にこなすし。誰にでも優しいし。
この前の上目づかいでもう死んでもいいと思いました」
「…急に饒舌になったな」

言われてみれば。でも言葉が次々に浮かんでくるんだよ。

「ははは…笑ってくれていいんですよ。そのくらい好きなんです。
始めはそうでなかったけれど、徐々に引かれていったんです。
でも、でもです。彼女、ちょっとみんなに嫌われてて…。
きっかけは小さな、本当に小さないざこざだったんですけど…。
いつのまにかイジメになってました」
「……、で？」

自販機の口数が減ってきたな…。実名はやばかったか。
いいよ。どうせここまで喋ったんだ。もうちっとばかし戯言に付き合ってくれ。

「だから、俺が助けてやるって思って。さっきも言ったように死んでもいいと思ったんです。
それから必死にお金を貯めました。彼女が働かなくても済むように。
イジメが終わるようにあちこちにお願いしました。彼女が悲しま

なくて済むように。
で、明日ぐらいに告白しようと思ってたんです」
「…」
「ま、フラれちゃったら意味ないんですけどね。その時はその時です」
「そうか…」
「はい」

しばらく沈黙する自販機。やがて、思い立ったように喋りだした。
「分かった。頑張れよ」
「はい、結構すっきりしました。朗報を期待しててくださいよ」

精一杯の笑みを浮かべて歩き出した。自販機に励まされるなんて不思議な気分だけど。

「あっ…」
何か小さな声が聞こえた気がした。でも気分が良かったのでそんなに気にしなかった。

でも、そう言ってはいられなかった。

ガッ、という鈍い音がした。振り返ると自販機が倒れてきていた。
「う、うわあああ」
「きゃあぁぁぁぁ」

女の子の叫び声が聞こえたけれどもう無理！自分の事で精一杯！

全神経を使って回避行動に移る。中学の剣道で鍛えた体力を舐めるなあぁぁ！

ズドオォォン

バキィィ

凄まじい音を立てて倒れる自販機。一気に砂煙が舞い上がる。

「けほっ、けほっうえぇ」

あ、いや、吐いてないよ。咽せただけだよ。

しかし…。結構ヒビが入ってるようだ。ぼろかったしなぁ。

あ、あれ。なんか人の影が…お、女の子！？なんで自販機の上に倒れているの！？

とりあえず助けないと！

「大丈夫ですか！？」

「う、うぅぅ。せんぱ～い」

「か、かえでちゃん！？」

なんでいるの？あ、ええ？え、嘘だろ。

「もしかしなくても…聞いてた？」

「うぅ、すいません～」

ナンテコッタイ。

「と、とりあえず立とう。怪我してない？」
「た、多分…。けどちょっと痛いです。ううぅ、ぐすっ」
「分かった、よし。ちょっと運ぶね？」

涙目な彼女をお姫様だっこでベンチまで運ぶ。
あ、俺いま一生分の運を使ってるんだなと思った。心から思った。
でも、さっきのを聞かれてたと思うと死にたくなった。

「で、結局はのところ変声器つかって遊んでた訳ね」
「はい…。で、せんぱいが見えたのでちょっといたずらしようと…」

らしいです。もう疲れた。なんて羞恥プレイなんだ。

「でもちょっと楽しくなってきて。ふと好きな人を聞いてみようと思ったんです」

「それであの有様、ってことね」

だから俺の弱点を知っていたのか。自分で自分が恨めしい…。

「はい。ちょっと恥ずかしかったけど…、でも嬉しかったです」

そう言って微笑んだ。…はあ、なんて可愛い。

「ありがとう」

「いえいえ、どういたしまして」

そういって二人で笑い合う。このまま時が止まればいいのに。

でもそう言っちゃいられない、か。…うん、できる。

「かえでちゃん」

「はい」

顔を切り替えて彼女と向かい合う。頑張れ俺。負けるな俺。

「変な感じになっちゃったけど、もう一回言います。

好きです。大好きでした。付き合ってください」

「…嫌です」

そういって、また微笑む君。

「そう…」

予想はしてたけど、とっても悲しい。
涙が出そうだ。

「ありがとう。本当に、ありがとう…」

涙目が気づかれないように帰ろうか。

「じゃあ、また…」

「まって?」

「へ？」

呼び止められた。もう泣いているのに。
振り返られない。直視できない。

でも君は待ってくれない。

「私は、“ただの”恋人は嫌なの。だから…」

ビックリして振り返ると、恥ずかしそうな君と目が合った。

「“未来のお嫁さん”として恋人になりましょう？」

「…はい！」

耐えられなくて抱きついてしまった。
彼女の体は、柔らかくて、暖かかった。
早起きもしてみるもんだなと思った。
そんな冬の朝だった。

（後書き）

さあ、みなさん明日の朝は出かけてみましょう。

もしかしたら、素敵な出会いがあるかもしれませんよ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6257z/

自販機の元で過ごすひととき

2011年12月20日22時46分発行